

蝶の博物詩

生態33

産卵1



モンシロチョウ 大根?の若葉に産卵
(1998年4月12日 奄美大島)

photo by

Nishiyama



ヒメシロチョウ ツルフジバカマに産卵
(2000年8月20日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態33

産卵1

「菜の花畠に、入日薄れ、見わたす山の端、霞ふかし」云々。懐かしい小学唱歌であるが、たぶん高学年で習ったと思う。私が学んだのは、普通の公立の小学校であるが、音楽担任の女性教師を除き、全員男性であった。生徒はもちろんのこと、親たちも全幅の信頼を寄せていた。そのころの集合写真をみると、教師は誰でも三つ揃えの背広を着、昭和15年カーキ色の国民服着用が義務づけられた後も、ネクタイは着用していた。日教組、教育委員会、PTA、授業参観など馬鹿馬鹿しいものはなかったし、日本人の劣化を示すmonster parentsもいなかった。今では考えられないことであるが、小中高校から大学医学部まで、女性の同級生は一人もいない殺風景な状態であった。

話が著しく脱線したが「朧月夜」の歌にある菜の花畠はしばしばモンシロチョウと組みになって、春の風物詩として登場する。かつて40円切手の絵柄となって長い間、私どもの目にとまっていた。モンシロチョウはこの黄色い花の蜜を吸いに来るだけではなく、産卵に訪れたり、まもなく羽化する雌を探し廻っているの、菜の花畠を乱舞しているはずである。

WienからMünchenに向かう列車の車窓からみた広大な菜の花畠は実に美しかった。近年、わが国でも観光のために千葉県をはじめ各地で菜の花(アブラナ、菜種)を栽培しているが、前号に記した孀恋村のキャベツ畠と同様に、モンシロチョウの乱舞する状態をみることはない。アブラナにとって、この蝶の幼虫は害虫であるから農業で殺戮しなくてはならないのだ。

アブラナは名の示すごとく、その種子から油をとって利用する重要な植物で、日本へは紀元前に中国から伝来し、戦国時代から油料理用となった。しかし、「朧月夜」の歌の時代(1914年)ごろには、油性成分の多いドイツ産のセイヨウアブラナに取ってかわられている。

アブラナや大根などの辛味はカラシ油配糖体という一群の二次代謝成分によるもので、アブラナ科植物を害虫から守るためのものであったが、モンシロチョウはこの有害物質を克服し、むしろ産卵を刺激、誘発する物質として利用するようになった。この物質がシニグリンであることが1966年に判明し、このころから産卵を誘発する化学物質の同定が進み、1990年にキャベツに含まれるグルコブラッシンという物質がシニグリンの1,000倍ほどの強さで、しかも単独で産卵刺激性を示すことが発見された。

交尾をすませた雌には、産卵という大仕事が残っている。雌蝶は植物のないところでは早く飛び、草があるとゆっくりと植草を探す。はじめは視覚によって植物の大きさ、形、色で見当をつけ、次に嗅覚で感じ、葉に止まってその表面を前肢で軽く叩いて産卵刺激物質または阻害物質の存在を感覚細胞(味覚受容体)で確認する。その経過は蝶の種類によっておのおの特徴があり、野外の生態観察のもっとも興味のある点であろう。

モンシロチョウやヒメシロチョウは葉の表面にとまってから腹部を美しく曲げて葉の裏に1個ずつ産卵する。この産卵姿勢は代表的なものとしよう。

西山茂夫